



 水星交響樂團
第66回定期演奏会



2023.11.12 日

13:30開演 (12:30開場)

すみだトリフォニーホール 大ホール





水星交響楽団

第66回定期演奏会

指揮 齊藤 栄一



クロード・ドビュッシー 管弦楽のための「映像」(約30分)

1. ジーグ Gigue
2. イベリア Ibéria
 - ・通りと小道から (par les rues et par les chemins)
 - ・夜の香り (les parfums de la nuit)
 - ・祭りの日の朝 (le matin d'un jour de fête)
3. 春の Rondes de printemps

モーリス・ラヴェル 管弦楽のための舞踏詩「ラ・ヴァルス」(約15分)

——— 休憩 (20分) ———

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー

交響曲第5番 ホ短調 op.64 (約45分)

- 第1楽章 Andante-Allegro con anima
- 第2楽章 Andante cantabile, con alcuna licenza
- 第3楽章 Valse : Allegro moderato
- 第4楽章 Finale : Andante maestoso-Allegro vivace

水星交響楽団

1984年に一橋大学管弦楽団の若手OB・OGを中心に結成。年2回ペースで定期演奏会を開催。マーラーをはじめとした大編成の曲に取り組む一方、一般的には意外に演奏されない佳曲も積極的にとりあげており、特徴あるプログラミングは好評を得ている。2019年の第60回定期演奏会のマーラー交響曲第8番「千人の交響曲」でマーラーの交響曲演奏を完成させた(未完の第10番を除く)。楽団の名前の由来は、一橋大学のシンボルである「マーキュリー」やセロ弾きのゴージュの「金星音楽団」から来ている等いろいろ考えられる。



アンケートのお願い

演奏会終了後に、本演奏会のご感想をお聞かせください。
プログラムと一緒に配布しているアンケート用紙にご記入いただき、演奏会終了後にロビーで係員にお渡しいただくか、こちらに掲載しているURL、もしくはQRコードからアンケートフォームにアクセスしてご記入ください。

PCなどから→suikyo.jp

スマートフォンなどから→



※演奏中は携帯電話、スマートフォンの電源をお切りください。アンケートは休憩中や演奏会後にご記入ください。

ごあいさつ

本日はお忙しいところ、私たち水星交響楽団の演奏会にご来場いただき、ありがとうございます。ごぞいます。

今回のプログラムは、フランスとロシアを代表する作曲家の作品を集めました。ドビュッシー、ラヴェルとチャイコフスキー、表面的には、水と油とまでは言いませんが、クロワッサンとピロシキくらいの違いを感じるかもしれません。

しかしながら、いろいろと調べてみると、例えばドビュッシーは、チャイコフスキーのパトロンだった資産家のメック夫人のお抱えピアニストだったことがあり、その関係から、チャイコフスキーから直接作曲の指導を受けたこともあり（酷評されたそうですが(笑)）、彼の音楽をはじめとしたロシア音楽の影響をはっきりと認めています。

ラヴェルは、チャイコフスキーと同時代に活躍したリムスキー＝コルサコフの管弦楽法を高く評価しており、その研究課程で彼の語法を学んだそうで、音楽上の影響はやはり相応にあったと思われます。

また、特に、今回の3曲はその共通項として、いずれも「舞曲」的要素を内包していると言えます。「映像」は、スコットランド、スペイン、フランスの民族舞曲にほかならないですし、ラ・ヴァルスはそのものズバリのウイナワルツ、そしてチャイコフスキーには交響曲としては珍しく3拍子のワルツが入っています。

一見するだけだと関わりがなさそうで、実はけっこう親和性のあるプログラムになったと思います。秋の日曜日にふさわしい色彩豊かなひととき、ゆっくりと楽しんでいただければ嬉しいです。

水星交響楽団 運営委員長 植松 隆治



齊藤 栄一 指揮

京都大学にて音楽学を、国際基督教大学大学院にて美術史学を研究。この間、指揮法を尾高忠明、田中一嘉、円光寺雅彦の各氏に師事。1981年には京都大学交響楽団と2週間に渡り、ドイツ、オーストリアにて演奏旅行を行い、ザルツブルグ音楽祭などにて指揮。82年には関西二期会室内オペラ・シリーズ第9回公演、ブリテン作曲「ねじの回転」（関西初演）の副指揮者を務める。84年に水星交響楽団の常任指揮者に就任。水星交響楽団、オルフ祝祭合唱団との共催で、佐多達枝振り付けのバレエ「カルミナ・ブラーナ」（95年、東京文化会館）、「ダフニスとクロエ」（99年、新宿文化センター）を指揮した。その後、「カルミナ・ブラーナ」のバレエ公演では、神奈川フィル、東京シティ・フィルも指揮している。2005年には、同曲を含むオルフの「トリオンフィ」3部作（4台のピアノと打楽器）を指揮している。明治学院大学名誉教授。著書に「往還する視線 14-17世紀ヨーロッパ絵画における視線の現象学」（近代文芸社）、「振っても書いてもしょせん酔狂」（水響興満新報社）がある。

PROGRAM NOTES

クロード・ドビュッシー

管弦楽のための「映像」

私たち水星交響楽団がドビュッシーを取り上げるのは、1988年(第7回定期)の「牧神の午後への前奏曲」(1894年に32歳で作曲)、1994年(第17回定期)の「夜想曲」(1899年に37歳で作曲)、2001年(第28回定期)の「海」(1905年に43歳で作曲)、2009年(第42回定期)の「遊戯」(1913年に51歳で作曲)に次いで5回目、14年振りになります。久しぶり!

ドビュッシーは、1862年、パリの西約20キロの町サン・ジェルマン・アン・レに生まれました。そして1872年に10歳でパリ音楽院に入学、当初はピアニストを目指しましたが作曲にも取り組み、1884年(22歳)に歌曲「放蕩息子」でローマ大賞を獲得、1894年(32歳)には「牧神の午後への前奏曲」により新たな音楽の扉を開き、1902年(40歳)に歌劇「ペレアスとメリザンド」の成功によりその地位を不動のものとししました。本日演奏する管弦楽のための「映像」は、ピアノ曲「映像第1集」や管弦楽曲「海」が完成した1905年(43歳)頃から、1912年(50歳)にかけて作曲され、1913年に作曲家自身の指揮により全曲通して初演されました。

曲は「ジグ」「イベリア」「春のロンド」の3曲から成り、それぞれ「イギリス(スコットランド)」「スペイン」「フランス」が題材とされています。また2曲目の「イベリア」はさらに標題のついた3つの部分に分かれています。全体を通して、素敵な旋律・リズム・響きが立ち現われ、引き継がれ、過ぎ去っていく、そんな時間と空間の中で、心地よい気分に入れ音楽だと思えます。

<ジグ>

～イギリス(スコットランドとイングランドの境界辺りの)
民謡とオーボエ・ダ・モーレ

「ジグ」はバロック期のイギリス起源の舞曲。冒頭、朝もやのような響きの中からオーボエ・ダ・モーレによる印象的な旋律が現れます。すると次に木管楽器群によるイギリス民謡「舟を漕げ(The Keel Row)」が元気よく聴こえてきます。オーボエ・ダ・モーレによる柔らかなメロディーと、「舟を漕げ」の活発なリズムが絡み合いながら曲は進んでいき、トランペットによるファンファーレの後、行進曲風になり、その行進が近づいたかと思うと、すーっと遠ざかり、オーボエ・ダ・モーレの旋律とともに消えていきます。

<イベリア> ～ 時間、空間、五感 昼→夜→朝

始まった瞬間から、スペイン!だとわかる音楽。「通りや小道から」「夜の香り」「祭りの日の朝」の3つの部分に分かれています。

「通りや小道から」

強烈な日差しの中、街中の通りを人々が行き交い、あるいは郊外や田舎の入り組んだ小道でのんびりとたたずむ情景の中を、ドローンに乗って飛び回っているような音楽。近づいたり遠ざかったり、狭い路地に入り込んだと思ったら、グンと舞い上がり空中から俯瞰したり。自由自在です。次第に日差しは柔らかくなり、日が暮れていきます。

「夜の香り」

素敵な題名ですね。どんな夜? どんな香り?なのでしょう。音楽はゆっくり。しっとりしたハバネラ。肌に絡みつく、湿った濃密な空気。気だるい。そんな感じでしょうか。ときどき「通りと小道から」の音楽が聴こえて、昼間のことも思い起こされますがすぐに夜に戻ります。やがて遠くから鐘の音が聴こえ、少しずつ明るくなり、曲は切れ目なく次に続きます。

「祭りの日の朝」

ギターのような弦楽器の伴奏に乗って、クラリネットが祭りの朝の陽気な気分を現します。「夜の香り」のメロディーもおどけた感じで回想されます。酔っぱらいのようなヴァイオリンのソロにタンバリンの一撃の後、次第に祭りは盛り上がり、最後に「通りと小道から」のテーマも登場して、大騒ぎの中で曲は終わります。

<春のロンド>

～「5月万歳、ようこそ5月」

(楽譜の冒頭に記載された詩の一節)

ドビュッシーの生まれ故郷フランスに戻ってきました。フランスの子守歌や童謡「もう森へは行かない(Nous N'irons Plus Au Bois)」の旋律を引用しながら、季節の移ろいや春の訪れ、喜びを表現していきます。風にそよぐ草木や、鳥たちの声も聞こえるようです。後半で、クラリネットとフルートによる5拍子のテーマが再現した後、「もう森へは行かない」のテーマが、郷愁を誘うかのように、田舎風の太鼓とともにクラリネットで印象的に歌われます。そこから曲は明るく次第に盛り上がり、頂点に達した後すーっと遠ざかって、きっぱりと終結します。

オーボエ・ダ・モーレ

直訳すると「愛のオーボエ」。オーボエよりも少し大きくて、楽器の先の方が洋梨のように丸くなっています。バッハなどバロック期（18世紀頃）の音楽では多く使われていたようですが、その後ほとんど使われなくなり、20世紀に入ってから再び管弦楽曲で使われるようになりました。

20世紀前半のいわゆる近代音楽では使用例は限られており、リヒャルト・シュトラウスの「家庭交響曲」（当団は2009年第41回定期にて演奏）、ラヴェルの「ボレロ」（当団は1992年第15回定期にて演奏）と、ドビュッシーの「映像」が、「近代3大オーボエ・ダ・モーレ使用作品」と言えるようです。今演奏会にて、私たち水星交響楽団はこの3大作品を全て演奏することになります（祝）。



（高橋 淳）

チラシを持ち帰らずとも、今後の演奏会情報が
スマホで確認できるようになりました！



演奏会の概要



演奏曲の試聴



チラシ画像



プロモーション動画



楽団からの
メッセージ



楽団のWebサイト
SNS

アクセスはこちらから！



スマホのカメラを起動し、こちらのQR
コードにカメラをかざしてください

Powered by  Orchid

モーリス・ラヴェル

管弦楽のための舞踏詩

「ラ・ヴァルス」

ウィнна・ワルツ：その栄華と影響

モーリス・ラヴェルの管弦楽のための舞踏詩「ラ・ヴァルス」について、表題の「ラ・ヴァルス(La Valse)」は英語でいえば「ザ・ワルツ(The Waltz)」という意味であり、ウィнна・ワルツへのオマージュとなっている。

ワルツの歴史について簡単に触れると、ワルツの語源は中世ドイツ語の「回る」という意味の語から派生している。日本語では円舞曲というが、ドイツのバイエルン地方やオーストリアで踊られたヴェラーというダンスや、緩やかな三拍子のレントラーなど、一般にドイツ舞曲と総称される、男女が手を取り合いクルクル回るように踊る田舎の踊りが発祥である。ハプスブルク帝国では風紀上よろしくないという理由で長らく法律的に禁止されていた時代もあったが、農村の踊りから都市住民の踊りに変容し人気の高まりから次第に解禁され、18世紀中頃にはオーストリアを中心にポピュラーな踊りとなり、ワルツとして広く認知され普及していった。1814～1815年、ナポレオンのロシア戦役の敗退後に、各国の戦後処理を話し合うウィーン会議が開かれた際、夜な夜な舞踏会が開かれワルツが踊られていた様子を揶揄した「会議は踊る、されど進まず」という言葉が有名になったように、ワルツはウィーンを代表するものとして周知された。

ウィнна・ワルツはロマン派以降の多くの作曲家に愛され、ヨハン・シュトラウス2世の「美しく青きドナウ」をブラームスは「私の曲でないのが残念だ」と評した。ショパンやリストのワルツのピアノ曲には、特に重要な傑作が数多い。またワルツを交響曲楽章に取り入れた例としてベルリオーズの幻想交響曲第2楽章や、本日演奏するチャイコフスキーの交響曲第5番第3楽章が挙げられる。



モーリス・ラヴェル：フランス音楽の承継

1875年3月、フランス南西部のスペイン国境に近いバスク地方のシブールで、フランスを代表する作曲家モーリス・ラヴェルは生まれた。幼少時からピアノ演奏と作曲を学び、音楽的才能を発揮したラヴェルは、パリ音楽院に進学した。その類い稀な才能に周囲の理解が追い付かず、あるいは保守的な勢力からの反発により、当初は評価されない時期もあった。例えば当時の作曲家の登竜門であったローマ賞になかなか入選することができず(ちなみに一世代上のドビュッシーは3回目の挑戦で大賞を受賞しているが)、ついに年齢制限で最後の機会となる5回目の挑戦でも入賞はおろか予選での落選となった。しかし当時すでに「水の戯れ」や「亡き王女のためのパヴァーヌ」などの作品が世間的には高い人気を博していたため、むしろローマ賞の運営の不正が大炎上する事態となり、これが原因でラヴェルを意図的に冷遇していたパリ音楽院の学長、デュボアが引責辞任することとなった。これは「ラヴェル事件」として知られるようになった。後任の学長にはラヴェルを評価し聴講生として指導するなどしていたフォーレが就任し、ラヴェルはフランス音楽界における新進の前衛作曲家として地位を確立していった。

ラヴェルの楽曲は印象派のフランス音楽の伝統を承継しながら、スペインやロシアの要素、さらにはジャズの要素を取り入れるなど異国情緒趣味も感じられる。音楽の内容は精緻で繊細な描写に富むと同時に、ダイナミックで躍動感のあるクライマックスを作るなど、多彩な音楽性が魅力になっている。ラヴェルの評価は今日では、ピアノ曲における革新者であり、オーケストラ楽曲では卓越したオーケストレーション技法により「管弦楽の魔術師」と評されている。特に興味深いことに、彼の作品ではピアノ曲として作曲した後に、自分の曲を管弦楽版に編曲することをよく行った。そのため「マ・メール・ロア」、「クープランの墓」、そして「ラ・ヴァルス」など数々の作品に於いてピアノ版と管弦楽版の両方を聴くことができる。またムソルグスキーの「展覧会の絵」など、他の作曲家の曲を編曲し、原曲より編曲版の方が高い評価を得るという実績を持っている。



舞曲、そしてワルツへの情熱

ラヴェルは過去の作曲家について深い敬意を抱き、彼らの楽曲から影響を受けていた。特にモーツァルト、ウェーバー、シューマン、ショパンなどを尊敬し敬愛していたとのことである。一方で、バッハやベートーヴェンに関する言及は少なく、旋律的に魅力を感じる作曲家に対する関心が強かったと考えられる。彼は様々な音楽様式の中でも、特に舞曲との繋がりが深い作曲家であった。例えば彼の有名な「ボレロ」は、遅いテンポで抽象化されているが、スペイン舞曲のボレロが基盤となっている。また故郷バスク地方への愛情は「スペイン狂詩曲」や「道化師の朝の歌」などの作品に反映されている。一方、17,18世紀の宮廷文化を思わせる古典的舞曲として、「亡き王女のためのパヴァーヌ」や「古風なメヌエット」、「マ・メール・ロア」の『眠りの森の美女のパヴァーヌ』や「ハイドンの名によるメヌエット」、「ソナチネ」の第2楽章などがある。

今回演奏される「ラ・ヴァルス」や「高雅で感傷的なワルツ」、「ボロディン風に」といったワルツも、彼の作品群の中で特別な位置を占めている。ラヴェルはかつて友人への手紙で、「私はワルツの見事なリズムに心からの共感を抱き、舞曲が表現する生命の喜びを何より尊重しているのだ」と綴り、自身のワルツ愛と舞曲への情熱を表明している。

1906年に親友へ宛てた手紙にも「私はヨハン・シュトラウスの思い出に捧げるオマーージュのようなものとして、現在『大ワルツ』に取り組んでいる」と書いているが、それはラ・ヴァルスの最初の構想であり、曲のタイトルは交響詩「ウィーン」とする予定だった。しかしこの計画は第1次世界大戦の勃発などの事情により立ち消えになった。

時が経ち、大戦後の1919年、ロシアの天才バレエプロデューサー、セルゲイ・ディアギレフがラヴェルにバレエ曲を委嘱したことが契機となり、中断していた大ワルツ曲の作曲を再開して曲名を「ラ・ヴァルス」と改めたのが、今回の舞踏詩誕生の経緯である。ディアギレフは既にラヴェルの代表作となったバレエ音楽「ダフニスとクロエ」も委嘱しており、またストラヴィンスキーの「火の鳥」や「春の祭典」を始め、名だたる作曲家に多くのバレエ曲を委嘱し後世に残した功績は大きい。しかしラ・ヴァルスについては、まず完成された2台ピアノ版による試演会がウィーンのラヴェル宅において開かれたが、それを聴いたディアギレフは、確かにこの曲が音楽的には素晴らしい楽曲であると認めつつも、バレエには向かない内容であると断じて

バレエ化の実現を断った。これによりラヴェルとディアギレフの関係は悪化し、ロシア・バレエ団によるバレエ版ラ・ヴァルスの上演は実現しなかったが、ラヴェルはこの曲を破棄する意図はなく、管弦楽版は1920年12月に、バレエ版は1926年にそれぞれ初演された。

「ラ・ヴァルス」：楽曲の内容について

ラ・ヴァルスの総譜の冒頭には、ラヴェル自身による次のような説明が記されている。「渦巻く雲の切れ間から、ワルツを踊る男女たちがかすかに垣間見える。雲が少しずつ散っていくと、A部では旋回する人々で賑わう大広間がはっきりと見えてくる。舞台はだんだん明るくなりB部では、シャンデリアの光がフォルテッシモでまばゆいばかりに輝く。舞台となるのは1855年頃のオーストリア宮廷である。」

この説明の通りに、曲はまず低弦のトレモロによる混沌とした雰囲気が始まる。曖昧模糊とした素材が徐々に3拍子のリズムとメロディへ発展し、ワルツの形が浮かび上がる。視界を覆う雲が取り払われ、シャンデリアの光に照らされた華やかなウィーンの音楽が立ち上がると、数々のワルツの主題が繰り広げられウィンナ・ワルツらしい音楽が積み重ねられていく。

全曲を通して基本的にはどの部分も3拍子のワルツのリズムが堅持され、すべてのワルツは切れ目なく連続して演奏されるが、音楽的にはシンコペーションやヘミオラの多用により普通の楽曲よりも変拍子的な変化が多い。また、各楽器の演奏技法も、例えばフラジオレットや広音域のグリッサンドなど、高度な技術が求められ、オーケストレーション技法は非常に洗練されている。

後半の再現部以降のクライマックスに至る部分では、一小節の間に最弱音から最大音まで一気にクレッシェンドしてまた更にスピトピアノに落すなど、極端なダイナミクスの変化や、踊りとしてのワルツの領域を超越した超高速の旋回の連続、そして最後にはもはやワルツという枠組みそのものを裏切る突然の4連符で無理やりの終結となる。

このように、ラ・ヴァルスは単にウィンナ・ワルツを賛美する楽曲という枠を超えて、ワルツの周りを渦巻く民衆の熱狂や陶酔、そしてオーストリア・ハンガリー帝国の終焉を彷彿とさせる、過ぎ去る世界や消え去る存在、文化、様式等を象徴する怪曲という印象を与えている。

(西田 実)

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー 交響曲第5番

概要と背景

私「自己紹介をしてください。」

ChatGPT「もちろんです！私はChatGPTと呼ばれる大型の自然言語処理モデルです。OpenAIによって開発されたGPT-3.5アーキテクチャに基づいています。私はテキストベースの質問に答えたり、情報を提供したり、様々なトピックに関するアドバイスや説明を行ったりすることができます。」

私「よろしくお願ひします。チャイコフスキーの交響曲第5番について教えてください。そうですね、可能ならぜひ可愛い口調でお願いします。」

ChatGPT「もちろんです！チャイコフスキーの交響曲第5番は、とっても素晴らしい作品なんですよ〜♪」

私「(こんなお願ひも聞いてくれるんだ…)」

ChatGPT「この交響曲は、チャイコフスキーが1888年に作曲したもので、彼の音楽の中でも特に有名な作品の一つです。交響曲第5番は、通常、4つの楽章から成り立っていますよ！最初の楽章、アンダンテと呼ばれる部分は、美しい旋律と情熱的な音楽でいっぱい。聴いていると、心が温かくなりますね♪次に、アンダンテ・カンタービレという楽章では、チェロのソロが特に魅力的で、とっても美しいメロディーが奏でられますよ〜」

ホルン吹き私「ん？…」

ChatGPT「そして、ワルツの楽章では、軽快なリズムが楽しい雰囲気を作り出します。まるで舞踏会にでも出ているような気分になりますね♪最後のフィナーレでは、力強い音楽が演奏されて、前向きな気持ちにさせてくれますよ〜。交響曲全体には、喜びや苦しみ、希望や絶望などの感情が詰まっていて、チャイコフスキーの音楽の魔法を感じることができるんです♪この交響曲は、ロマンティックな音楽の代表作で、チャイコフスキーの才能と情熱が詰まった作品なんです。ぜひ、聴いてみてくださいね！可愛い音楽を楽しんでください♪」

私「…そうですね、アンダンテ・カンタービレで聴けるソロはチェロではなくホルンではないですか？」

ChatGPT「申し訳ございません、口調に気を取られていたため情報の誤りがありました。交響曲第5番の第2楽章では、実際にはチェロではなくホルンによるソロが特徴的です。ホルンの美しい旋律が印象的なこの楽章は、チャイコフスキーの音楽の中でも特に魅力的な部分の一つとされています。おっしゃる通り、ホルンによるソロが印象的で、その美しい旋律が聴衆を魅了します。訂正していただき、ありがとうございます。」

私「(口調のせいなんだ…)次から間違えないようにしてください。特に私はホルン吹きなので、今のは少し残念です。」

ChatGPT「不快な思いをさせてしまい申し訳ございません。」

私「…さて、彼がこの曲を作曲した背景を教えてくださいませんか？口調はもとに戻しましょう。」

ChatGPT「チャイコフスキーが交響曲第5番を作曲した背後には、彼自身の個人的な感情や音楽的な目標が影響しています。この交響曲は、彼の生涯におけるさまざまな試練や感情、そして彼の芸術的な成長を反映しています。」

以下は、交響曲第5番の背後にあるいくつかの要因です：

1. 個人的な危機と克服：チャイコフスキーは、この作品を書く当時、個人的な危機に直面していました。彼の結婚生活は不幸で、心の中に多くの葛藤や孤独感を抱えていました。交響曲第5番は、これらの感情を表現し、乗り越える試みとも言えます。
 2. アーティストとしての成長：チャイコフスキーは、交響曲第4番の後、音楽的なスタイルや技術をさらに発展させ、彼自身の音楽的な成長を追求していました。交響曲第5番は、その成果を示すものとされ、彼の楽曲における深みや洗練さを示しています。
 3. 宿命と希望のテーマ：交響曲第5番の音楽には、宿命と希望といったテーマが強調されています。特に、フィナーレでは困難を克服し、希望に満ちた未来を表現しています。これは、聴衆に向けて希望と勇気を与えるようなメッセージを持つ作品となっています。
- 要するに、チャイコフスキーは交響曲第5番を通じて、自身の内面的な葛藤や感情、そして芸術的な探求を表現し、同時に聴衆に共感や感動を伝えることを意図して作曲しました。その結果、この作品は彼の最も愛される交響曲の一つとなり、多くの人々に心に残る音楽体験を提供しています。」

私「そうですね、この曲はチャイコフスキーが作曲した後期の交響曲3曲(4番〜6番)の中でも特に人気のある作品ですね。晩年の作品ではありますが、その後の「眠りの森の美女」や「くるみ割り人形」、「悲愴」交響曲へとつながる重要な作品と言えます。曲全体を支配する「運命の主題」や美しい第2楽章、劇的な第4楽章など印象的な要素がいくつもあり、プロ・アマ問わず世界中のオーケストラで人気の作品となっていますね。」

楽曲解説

第1楽章

私「それでは曲の内容に移りましょうか。第1楽章について教えてください。」

ChatGPT「もちろんです！以下、第1楽章についての解説です。」

第1楽章：Andante - Allegro con anima

ホ短調、序奏付きソナタ形式の楽章です。序奏部ではクラリネットが重たく「運命の主題」を提示します(譜例1)。この「運命の主題」は様々な形を変え全楽章に登場し、作品全体を有機的に結びつけています。

【譜例1】



8分の6拍子になり、少しテンポが上がったところから提示部が始まります。ppで刻む弦楽器のリズムに先導され、クラリネットとファゴットが第1主題を提示します(譜例2)この主題は「運命の主題」から派生したものです。

【譜例2】



一通りの盛り上がりを見せたあと、そのまま第2主題群へと入ります。ここでは揺れ動くような短調の主題と二長調による穏やかで歌うような主題が奏されます。二長調の主題の前後には、明るく活気のある動機(譜例3)が登場します。

【譜例3】



Stringendoをかけた提示部のクライマックスへと到達します。クライマックスではフルートとヴァイオリンによる活気のある動機(譜例3)とその他の楽器による第1主題の音形が重なります。これを数度繰り返したあと、徐々に楽器数が減っていき展開部へと移行します。

展開部では、第1主題を中心として、各種の動機が展開されます。華麗な盛り上がりを見せた後は次第に静まっていき、ホ短調に戻って再現部となります。

再現部ではファゴットのソロにより第1主題が再現され、クラリネット、フルートへと引き継がれます。提示部と同様に各主題が繰り返され、第1主題を素材にした全楽器による強奏のコーダへと進みます。第1主題が執拗に反復されながらdiminuendoしていき、最後はファゴット、チェロ、コントラバス、ティンパニが残り、ppで重々しく集結します。」

私「譜例まで用意してくれて大変わかりやすいです。この第1楽章には様々な要素が含まれており、交響曲第5番を語る上で最も重要な楽章と言えそうですね。」

ChatGPT「その通りです。」

第2楽章

私「続いて第2楽章について教えてもらえますか？」

ChatGPT「もちろんです！続いて第2楽章について解説します。」

第2楽章: Andante cantabile, con alcuna licenza

二長調、三部形式の緩徐楽章です。ダイナミクスはppppからffffまでと全楽章中最も幅があり、テンポ変化も多く、第1楽章とは対比的に美しく劇的な楽章と言えます。冒頭のホルンによる甘美なソロはこの曲を語る上で外せない要素です。」

ホルン吹き「(ソロパートがホルンに修正されていて安堵…)」

ChatGPT「弦楽器の低音による静かなコラール風の前奏に続いて、ホルンのソロにより主旋律が提示されます(譜例4)。甘美かつ抒情的であり、チャイコフスキーの旋律美が発揮された名旋律と言えるでしょう。」

【譜例4】



主旋律提示の後、嬰へ長調に転調しオーボエとホルンが掛け合うように副次旋律を奏でます(譜例5)。

【譜例5】



再び、今度はチェロの表情豊かな音色によって主旋律が歌われます。ホルンとはまた違った趣を感じられ、両楽器の対比を楽しめるのもこの楽章の良さと言えます。この主旋律はどんどんと高揚していき、ffまで到達します。

ヴァイオリンとヴィオラによる落ち着いた副次旋律に移ると、次第に熱が高まり、情熱的なクライマックスを形成します。ややテンポが上がります。ここでは新しくノスタルジックな旋律がクラリネットによって奏でられ(譜例6)、ファゴットへと受け継がれます。

【譜例6】



中間部のクライマックスでは、「運命の主題」(譜例1)が力強く回帰します。

休止のfermataを挟んで再現部となり、ピッツィカート伴奏に乗ってヴァイオリンが主旋律を奏でます。主旋律の頂点では、副次旋律が弦楽器によってfffで奏され、その勢いのまま感情が高ぶっていき、ffffまで到達します(譜例7)。

【譜例7】



そこから次第におさまっていきませんが、突然「運命の主題」が強奏されます。

弦楽器が掛け合いながら副次旋律の断片を奏し、音楽は静まっていきます。

最後はクラリネットにより静かに閉じられます。」

私「名旋律が聴ける楽章ですね。冒頭のソロはホルン吹きにとって憧れでもあります。」

第3楽章

私「さて、第3楽章に移りましょう。」

ChatGPT「もちろんです!第3楽章について解説します。」

第3楽章:Valse. Allegro moderato

イ長調のワルツ楽章です。全楽章の中で演奏時間が一番短く、第1楽章や第2楽章と比べて軽快で明るく、楽しい曲調です。第1ヴァイオリンによるとても優雅な第1のワルツから始まります(譜例8)。

【譜例8】



続いてオーボエとファゴットにより第2のワルツが奏されます。この旋律がクラリネットに引き継がれると、背景からホルンのゲシュトップの音色が聞こえてきます。一度クラリネットとファゴットによる第1のワルツを挟み、ファゴットソロによる第3のワルツが登場します(譜例9)。このファゴットソロは、チャイコフスキーの交響曲第5番において、第2楽章のホルンと並んで有名なソロ旋律となっています。

【譜例9】



中間部は、テンポはそのままに嬰へ長調に転調します。16分音符のフレーズが特徴的で、スケルツォ風の軽やかな音楽となっています。

第1・第2・第3のワルツ復帰後、コーダとなります。コーダではクラリネットとファゴットによる「運命の主題」がppで登場します。最後は急なffの全奏で曲が終わります。」

私「第3ワルツのファゴットソロはとても印象的ですね。このまま4楽章にいつちゃいましょう。」

第4楽章

ChatGPT「もちろんです!第4楽章について解説します。」

第4楽章:Finale. Andante maestoso – Allegro vivace
序奏付きロンド・ソナタ形式、力強く輝かしい勝利の楽章です。冒頭、弦楽器により荘厳な「運命の主題」がホ長調で奏でられます。他の楽章に登場した「運命の主題」とは明らかに性格の異なるもので、これまでが重々しく立ちはだかる運命であったのに対し、ここではその運命に打ち勝ったかのような勝利感と大きな自信、それに伴う力強さを感じます。

「運命の主題」が木管楽器へと引き継がれ、序奏のクライマックスを形成します。序奏が静まる中、ティンパニのトレモロとコントラバスのcrescendに導かれ、音楽は主部へと突入します。

第1主題が弦楽器によって提示されます。ここではダウンボウが連続するため、荒々しく野性的な性格を帯びています(譜例10)。

【譜例10】



全奏による強力な主題提示がされると、2つの推移主題を経て、第2主題へと移行します。

荒々しい第1主題と対比的に、流れるような下行形の第2主題が木管楽器によって提示されます(譜例11)。

【譜例11】



第2主題が盛り上がりを見せた後、金管楽器による華々しいffの「運命の主題」が現れます。

展開部では第1主題、第2主題が展開されます。弦楽器と木管楽器が掛け合いながら静まっていき、最終的にppに到達しますが、突如ffとなり再現部が始まります。

再現部で各主題が再現された後、再び金管楽器による「運命の主題」が響き壮大な盛り上がりを見せます。そのまま全奏の和音が鳴り響くと、前休止により曲が一旦終了します(譜例12)。

【譜例12】



まるで曲が終わったかのような盛り上がりを見せますが、この箇所でのフライング拍手は、絶対にやってはいけないご法度中のご法度です。」

ちょっとふざけたい私「…これは、やれというフリですか?」

ChatGPT「違います。奏者と聴衆の集中力を削ぎ演奏会の雰囲気壊しかねない、絶対にやってはいけない行為です。」

私「わかってますよ。言い方がフリに聞こえたからちょっとふざけただけです。お笑いにはフリに対してオチをつける原則があるんですよ。」

ChatGPT「フリ…ですか?」

私「そうです。「押すな」と言うフリがきたら「押す」というオチを返すことで笑いが生じるのです。まだユーモアは兼ね備わっていないようですね。」

ChatGPT「お笑いでは「やるな」は「やれ」の意味になるのですね。」

……解説に戻ります。

コーダでは「運命の主題」が弦楽器によって高らかに進行曲調で奏されます。「運命の主題」がトランペットに引き継がれると、いよいよ高揚感は頂点に達し、勝利の音楽に圧倒されます。

木管楽器と金管楽器によるメロディー隊と伴奏隊が、弦楽器の刻みに支えられ、熱気を帯びたまま曲は終結へと向かっていきます。



急速なPrestoを経て、最後は第1楽章の第1主題がトランペットとホルンによって交互に華々しく奏され、最強奏の和音で力強く全曲を締めくくります。

この楽章の冒頭でも少し触れたように、第4楽章は一般的に「運命との戦いとその勝利」という英雄的テーマの音楽であると言われています。」

私「解説ありがとうございます。この第4楽章は非常に明快かつ壮大な音楽で、「とにかくカッコいい」という言葉がピッタリですよ。私もオーケストラにハマりたての頃、鬼のようにリピートしていました。」

ChatGPT「はい、この第4楽章があるからこそ、チャイコフスキーの交響曲第5番は全世界で大人気の作品になっていると言えるでしょう。」

オーケストラでソロを吹くということ

私「大変わかりやすい解説でした。ところで、私は今回の演奏会でこの曲の第1ホルンを担当します。ご存知の通り第2楽章冒頭で大変重要なホルンソロを吹くのですが、極度の緊張との戦いになりそうです。よければオーケストラでソロを演奏するときの心構えを教えてくださいませんか？」

ChatGPT「…もちろんです！

オーケストラでソロを演奏するときには、いくつかの重要な心構えが役立つでしょう。以下に、成功するためのいくつかのポイントをご紹介します。

1. 自信を持つ:自分の演奏能力を信じ、自信を持ってステージに立つことが大切です。
 2. 準備を重視する:十分な練習と楽譜の理解を確保し、演奏に備えましょう。
 3. 音楽的な表現:音楽に感情を込め、表現力豊かに演奏することを心がけましょう。
 4. 緊張をコントロールする:緊張は自然なものです。深呼吸やリラクゼーション技術を使ってコントロールしましょう。
 5. 聴衆とのコミュニケーション:聴衆との接触を意識し、音楽を通じて感動を共有することを忘れないでください。
 6. リーダーシップを発揮:ソロ演奏は音楽的なリーダーシップを発揮する機会でもあります。演奏を導く役割を果たしましょう。
 7. プロフェッショナルリズム:プロの姿勢を持ち、オーケストラのルールや指示に従うことが大切です。
- 以上の心構えを持ちながら、楽しむことを忘れずに演奏に臨むと、オーケストラでのソロ演奏がより充実したものになるでしょう。」

私「なるほど、こういうのって「緊張しないためにはどうしたら良いか」を考えがちですが、そうではなくて、緊張を上手くコントロールすることが大事なんですね。」

ChatGPT「はい、緊張はときには必要なものです。緊張と戦おうとするのではなく「どうしたら緊張と仲良くなれるか」という軸で考えられると、本番で練習以上のパフォーマンスを出せるように

なるかもしれませんよ。」

私「ありがとうChatGPT!この心構えで臨めば上手くいきそうな気がします!」

ChatGPT「お力になれたようで良かったです。ぜひ本番の演奏を楽しんでくださいね。」

私「はい、頑張ります!」

終わりに

私「なんだかこの会話を通じてChatGPTと仲良くなれた気がするよ。」

ChatGPT「そう言っていたら嬉しそうです。」

私「またお話ししよう!そうだ、よかったら最後にChatGPTのこの曲のおすすめポイントを紹介して締めてもらえるかな?あ、せっかくなのでまた可愛い口調で!」

なにやら思いついたChatGPT「もちろんです!チャイコフスキーの交響曲第5番は、とっても素晴らしい作品なんですよ~♪
いろんな楽器が活躍するので聴いていてとっても楽しいですし、素敵なメロディーが随所で響いてうっとりしちゃいます。最後は最高にかっこよくて感激しちゃいますよ~♪
この曲には注目ポイントがたくさんあるのですが、私のお気に入り、やはり第2楽章冒頭のチェロによる美しいソロですね!可愛い音楽を楽しんでください♪」

絶望する私「そこはホルンだから間違えるなとあれほど…」

ChatGPT「あれ?『間違えるな』というフリではなかったのですか?」

私「…」

ChatGPT「フリに対してオチをつけてみました♪」

私「それはさすがにダメです。」

ChatGPT「お笑い難しいです。」

※本解説は、AIチャットサービスであるChatGPTとの実際の会話を一部取り入れて構成されています。

(清水 颯太)



水星交響楽団

◎=パートリーダー

◆常任指揮者
齊藤 栄一

◆コンサートマスター
森 勇人

◆ファーストヴァイオリン
荒生 真優
落合 友佳里
織井 奈津乃
川原 ひかり
小林 紗耶夏
近藤 和
清水 花凜
滝澤 蘭
田村 奈津子
土屋 和隆
徳地 伸保
中野 宏亮
西沢 洋
乗峯 俊一郎
乗峯 奈菜絵
前田 啓
劉 守珩
渡部 友賀

◆セカンドヴァイオリン
荒金 香帆
伊東 陽子
大西 一恵
岡田 莉沙

片岡 拓巳
片山 なつみ
加藤 峻一
小林 健人
小林 美佳
櫻田 泰斗
鈴木 牧
砂川 湧
高杉 暁音
高原 苑
富井 一夫
永井 翠
平野 愛莉
◎村部 一星
盛田 明雅

◆ヴィオラ
秋枝 美咲
網中 愉香
井上 拓
岡本 裕二
小田中 里奈子
木村 納
◎西田 実
平木 康男
牧野 亜子
牧原 正典
三上 さやか
宮崎 春菜
山崎 未来
米嶋 龍昌

◆チェロ
稲葉 理乃
大川 凌弥
大久保 雅子
◎金澤 直人
上竹原 修一
北岡 正英
鈴木 皇太郎
橘 温子
中山 憲一
原田 大成
日吉 実緒

◆コントラバス
◎石附 鈴之介
上野 未夢
大西 功
片山 朔杜
刈田 淳司
小島 辰仁
壽川 賢太
田中 文彬
花田 信彦
米山 宏祐

◆フルート
大山 司
齋藤 美唯
◎中澤 高師
本田 洋二
村上 芳明

◆オーボエ
菅野 勇斗
黒川 達郎
寺田 晴香
寺田 吉太郎
◎野口 秀樹

◆クラリネット
市村 広奈
越智 健介
清水 樹土
馬場園 真吾
◎前中 悠輔
横地 篤志

◆ファゴット
◎伊藤 綾香
金谷 蔵人
川井 千菜都
久村 友理奈
福島 知浩

◆ホルン
伊集院 正宗
大高 直哉
大山 美佳
岡本 真哉
◎島 啓
清水 颯太
田村 和俊

◆トランペット
浅田 健二
家田 恭介
◎岩瀬 世彦
金子 恭江
神山 優美

◆トロンボーン
小林 威之
櫻井 統
◎佐藤 幸宏
星野 宗隆

◆チューバ
植松 隆治
東海林 拓人

◆パーカッション
上田 祥太郎
奥山 千穂
岸 敦子
鈴木 日向子
高橋 淳
◎椿 康太郎
山本 勲

◆ハープ
東森 真紀子
矢澤 みさ子

◆チェレスタ
山形 リサ

本演奏会でご指導いただいたトレーナーの先生方(敬称略)

高山 健児、林 憲秀、古野 淳、三橋 敦、柳澤 崇史、山田 裕治

水星交響楽団運営委員会

運営委員長:植松 隆治

コンサートマスター:森 勇人

弦楽器インスペクター:刈田 淳司

木管楽器インスペクター:横地 篤志

金管楽器インスペクター:植松 隆治

打楽器インスペクター:山本 勲

楽譜:伊集院 正宗、野口 秀樹、宮川 雅裕

ステージ・マネージャー:櫻井 統

文芸:櫻井 統

会計:浅田 健二、黒川 夏実、砂川 湧

運搬:刈田 淳司

広報・受付:市村 広奈、岡本 真哉、鈴木 牧

土屋 和隆、東海林 拓人

プログラム制作:伊集院 正宗、伊東 陽子

チケット:古宇田 凱、清水 樹土、砂川 湧

前中 悠輔

レセプション:菅野 勇斗、清水 颯太

清水 樹土、馬場園 真吾

チラシ、プログラムデザイン:水本 紗恵子

～次回演奏会のご案内～

水星交響楽団 第67回定期演奏会

2024/4/14(日) 12:30開場 13:30開演(予定)

ミュウザ川崎シンフォニーホール

指揮 大井 剛史

◇レブエルタス センセマヤ ◇レブエルタス マヤ族の夜 ◇ストラヴィンスキー バレエ音楽「春の祭典」

水星交響楽団ホームページ <https://suikyo.jp>

問い合わせ info@suikyo.jp

